

集四第學文教督基

6-2
686

基督教及教育

兌發店書社醒警京東

020430-000-8

特66-565

基督教及教育

原田 助/編

M28

ABI-0240



特66
565

序

宗教の社會の一大現象として基督教の其最大なる

一なり基督教の本邦に傳播せられてより年を経るに

しからば信徒尙多しとするに足らず然れども之が社會

に於けるの勢力の既に衆目の注視する所となれるが如し、

然れば基督教と社會の關係如何基督教と國体の關係如何、

基督教と教育の關係如何等の問題の如きは屢々論壇の題

目より上り宗教の敵味方と依て論争せられたりき、宗教と教

育と關しては或は曰く兩者の相衝突する者なりと、然るに

之を對して宗教と教育の相俟て人性を圓滿に發達すべし

と論ずる者あり、甲是乙非紛々として遽か結着を認むべ

からざる思ふは是れ至難の問題ならむ然れどもその至難な



るの偶ま此問題の重要なるを証するも足るのみ然り而して吾等は世の宗教以外の論者が動もすれば宗教も下だすも狭隘なる定義を以てし又た基督教主義教育なるものを誤解するの甚しきを見て最も慨すべしとなす本書は曾て六合雜誌上も掲載したる諸名家の論文中より此問題も關係せる數篇を集めたるものなれば素より一貫の趣向あるも非すと雖も以て基督教と教育の關係を知らんとする人士の指針となすに足らむ

明治二十八年十月

原田 助 識す

基督教及教育

目次

教育の目的	一
生前の教育	十五
有功の徳育	二十八
孔子の教	四十四
日本青年と英語	七十五
基督教主義の教育を論ぜ	九十一

基督教文學 第四集 基督教及教育

◎教育の目的

大西 祝

基督教主義の教育又之は反對して佛教主義の教育と云ふ
ことを聞くが此等の如何なる教育を指して云ふのである乎。
一寸聞けば双方も善く意味の譯つて居る様は見えるけれ
ども少し細かしく考へて見ると中々よく譯つて居るとい
云われぬ如何なる目的を立て如何なる方針を取り教育學
上の學理から云へば如何なる位地を占める教育を指して

基督教主義若しくは佛教主義と云ふのである乎。未だ明晰
なる説明と接したとがない。通常世に用うる語に随分漠然

としたもので一々之は明断なる定義を下すとの到底むづかしいとである。然も無知と迷と混雜との何時漠然とした思想から出て来る者であると思へば世は明断なる思想程入用なるものはない。世の光となる者の何時も明かなる思想である。殊に教育の主義など之を漠然とした思想の中は棄て置おくべきでない。今我國は基督教主義又佛教主義の教育を稱へる人々の早晩其稱へる教育の主義に判然とした定義を下すの必要を感じるであらう。予は爰は基督教主義又佛教主義の教育は定義を下す積りではない。只た夫等の教育を主張する人々の其主張する教育の主義は明断なる解釋を下すの必要があると思ふことに注意を促し、又夫等二派の教育ばかりでない凡べて教育

と稱するもの、目的と方針とを就いての明かなる思想を得ねばならぬと思ふと注意を促し度き積りである。教育の目的について明かなる思想を得る爲は今少しく其目的の根本の所について如何なる異種の方角を取るとか出来るかと云ふことを考へて見たい。何が教育の目的であるかと問へば先づよく聞く答は「完全なる人は爲す」と云ふのである。之は爲易い答であるけれども之ばかりでない餘り價値のない答である。何故と云ふは完全と云ふのは只だ人の望むべきことの記號の様なもので更は其記號の意味を説き明かさねば、實際教育の方針を示すに左まで益するといない。教育の目的を問ふ時は實以て問ひ度いとい如何なる人を完全なる人と稱するかと思ふのである。此問は對して完

全なる人とい天然に具へて居る諸の能力を各其適當の程度に發達さした人を云ふと答へれば前の答より猶は多少教育の目的を明ましたるに達ない。此答の中は諸の能力とあるの何々の能力を指し又其適當の程度とい丁度何程の處を云ふかの教育論の細かき點を渡れば之の別論として措いて爰は猶は一つ問ふべきところのある諸の能力を發達するは其程度の多少のあるも教育の上から云へば其能力の各其能力自身の爲めは發達さすべき者であるか否かと云ふとなり例へば知力の知力の爲は發達さし感情は感情の爲は意志の意志の爲は發達さすべきものである乎。將た諸の能力の中一の主となるものが有つて他の皆之が爲に發達さすべき者である乎。

右の問に對する答の如何に由て教育の目的は二の方向を生ずる様と思はれる。人間が具へて居る諸の能力の發達した結果を假りに智徳の二に分けて論ずると、一方の答から云へば智徳の間は段等の別のあるも(即ち徳の智より貴しとするも)双方もそれ相應にそれ自身の爲は發達さすの價值がある。智の全く徳の爲は發達さすべき者でない矢張りそれ自身の爲は發達さすべき者である。只だ或は徳の次に置くべき者であらうと云ふ。然し他の方の答から云へば教育の上は(但し純粹な學術技藝を教ふる上は)如何であらうとも教育の上は(凡べての事皆)徳の發達を以て終極唯一の目的とせねばならぬ。智の徳の爲は又徳を發達さすに入用なる程發達さす可きであると云ふ。

此第二の方向を取るのが彼の獨逸で最も勢力のあるヘル
バート派の教育説で、此説から云へば教育の徳育智育體育
の三分は分れる者でない徳育のみである、但し徳育を
發達させるに智識と身體との發達が入用であるから此等
をも固より發達させるは違ひない然し他の説とは其目
的とし意味とする所が違ふ、但し教育の目的の徳育の一端
にあるとするも徳育とい如何なるものを指すか、其中の
如何なるものを含み居るか説き明さねば其教育説のまだ
明かでない、其所謂の徳育の取り様次第で随分廣い意味に
も取れて知識も其中の一部となることが出来る、ヘルバル
ト派の説で云へば徳育の五個の倫理的觀念から成り立て
居るもので之を委しく論ずるより少々の紙數でい出来る

とでないから茲より其論述は立入るといしなない、今も云ふ
通り道徳と云ふ觀念の廣い狭いで右に述べた二の方向が
實際相似寄つたものと爲るともあるけれども大體の所か
ら云へば道徳を教育の唯一の目的とするか否か、必ず教
育の方針に多少の差響を生ずるものであるから之を以て
教育の主義は二の方向を分つもの適當のとであると思ふ、
然し何方どちらとして、即ちヘルバルト派の説でい勿論他の説
でも徳を育ふことを以て最も貴しとする以上は教育の目的
を定めるに最も緻密なる關係のあるもの、倫理説である、言
ひ更へれば教育の目的は局こまる所倫理學の上から定きまなければ
ならぬ、さすれば基督教主義又佛教主義の教育を明あら
やうと思ふならば双方の教の中なに籠こつて居る倫理説を明

にせねばならぬ。

前より完全の人と云ふとを解釋した中に人の天然より具へて居る諸の能力と云ふとがあつたが、此天然と云ふ者よついで又教育の主義より二の派を生ずる様よ思はれる。人が生來うまれつきに具へて居るものより皆其適當の度より發達さすべきもので、人間の理想より人間の天性を考へ之を明にして始て知れるのであると云ふものより天然的教育主義である。此主義より反對して人間が生れつき有て居るものは皆善いもの皆價值のあるものでない、其中より發達さす可きものもあれば又却て撲滅す可きものもある何を發達さし何を撲滅すべきかは人間の生れつきを見て知れるものでない、他より之を判別する者がなければならぬと云ふとが出来る。現より此主

義を取る教育説の少くない例へばプラトンの哲學から云へば人間の肉體又之より附き纏ふ凡べての情慾なごの人間の本性とも云ふべき道理心の邪魔をする者であるから若し其哲學の眞面目の所より從へば凡べて情慾なごの撲滅せねばならぬ。勿論非天然的教育主義を取る者でも人間の性を全うするとも反對するのではない、只だ其眞實の性の人間が此世で生れついて居る所と同一の者でないこと云ふのである。即ち現在人間が生れながらより有て居るものの中より其眞實の性を傷けて居るものがある、人間は生れながらより多少其眞實の性から墮落して居る者であること云ふのである。プラトンの説にても人間が肉體を有つて居るものより丁度天上の自由自在なる幸福の有様から墮落して

此世の牢屋に這入て居る様なものであると云ふ。又基督教の考を見ると非天自然的の教育主義が更によく譯る。其考で人間は生れながらに墮落した者で其生れつきを其儘發達さしては真正の人間と爲るとい出來ぬ、真正の人間となるに其靈魂が一旦生れ更はらねばならぬ、又人間の此世で終る者ではない、此世の只だ後の世は行く準備は過ぎない、人間の眞の故郷の未來の世はあるから此世で教育を施すよ、此世を終極の目的としてはならぬ専ら來世は行く用意の爲めよせねばならぬ。又基督教で云へば教育の目的は人間と云ふ理想を全うすると云ふよりも寧ろ人間は現はれて居る神の像を全うするにある。言ひ更へれば神の如く全くなるが人間の終極の目的である。さすれば基督教で

十

の教育の目的を示すもの、人間の生れつきでなく神の啓示である、此考を英語で云へば「ナチュラリスチック」は反對して「ジーボルナチュラリスチック」と云ふてよい佛教でも人間が此世に生れた儘での皆凡夫であるから修業をして菩薩とも佛とも爲らねばならぬとか又彌陀佛の誓願の力は頼つて來世の彌陀の淨土に生れる様よまなくばならぬとか説く所を見、又其總して厭世的なる所を見れば佛教主義の教育も亦非天自然的であらう斯く云へば必ず或僧侶達は佛教を厭世的なぞ、云ふの抑も淺はかな考で佛教の眞相は煩惱即菩提にあると云ふであらうが予の考で佛教を厭世的と云はれるのを恐ろしがるのが即ち淺はかな考で佛教の價値の其厭世的なる所よある、煩惱即菩提なぞ云ふ議論

が却て佛教の世の教化の上より有つて居る價值を損したの
 である。予の始も云つた通り佛教主義又基督教主義の教
 育に解釋を下す積りでなく只だ非天然的の教育主義の
 例として茲より少しかばり説を爲したのみである。尤も基督
 教を非天然主義と云つても決して其主義の極端に走らぬ
 ばならぬに定つて居ない。予の考へでの同じ基督教と云
 つても極く最初の時と中世紀と又宗教改革後との随分大
 切なる點に於ても其趣を異にして居る様に見える。又後來
 日本に基督教が廣まるならば其基督教は亞米利加や歐羅
 巴の基督教との随分異つた趣を呈するに相違ない。そこで
 我國で謂ふ所の基督教主義の教育の如何なる教育を指す
 者であるかはまだ是から定まる可きとであらう。

非天然的の主義では勿論天然的の主義でも教育の目的を
 立てるよの理想が必要である。何故と云ふに人間の其生れ
 つきの儘を發達さすべき者であるとすも如何様も發達
 さすべきかゝり現在ある儘を見ればかりでの譯らぬ矢張り
 哲學的よ人間の儘とすべき者を作らねばならぬ。そして又
 其儘即ち其理想の主として道德的觀念の上より建てねばな
 らぬといふ大概ね人の皆一致して居る所である。又基督教殊
 よ獨逸で云ふ福音主義の教育説よ云ふ様も教育の目的の
 神の像を人の心の中より形づくるよあるとするも其神の像
 と云ふの主として人間の道德的理想を高めた者である
 から矢張り其教育の目的の吾人の道德の念に其基を置く
 ものである。

今迄述べた所より由れば教育の主義より一方での總べて吾人の能力の皆それ自身の爲めは發達とするの價值ありとし又他方で教育の上よては其能力悉くはそれ自身の爲め發達すべき者でないとする別がある。又吾人の生れつべきは有つて居る者の皆發達すべき者で教育の目的は吾人の天然の性を探究ればそれで譯ると云ふ説と又之は反對する説とがある。然し何れの説にしても教育の目的の主として或は全く道德の觀念を求むべきものと云ふとい同一である。さすれば現今我國の教育に最も必要なるとは道德の理想を明よするものである。今迄孔孟の教又佛の教で養はれて居つた道德の觀念の勿論又廣く西洋の道德的觀念即ち基督教又希臘哲學又其他の哲學から來た思想で養は

れた觀念をもよく嚼^かむけて、茲より有力なる又高尚なる道德の理想を明にするとは今の世の中より最も必要なるのである。

◎生前の教育

松村 介石

生前の教育の事古來論じたるものなきにあらず又世間類例の實驗よりて漠然ながらも人の之を識らざるにあらず亦た怖れざるにあらずといへども近來進化説出で生理學開け遺傳の理法いよゝ明確になりゆくに従ひて始めて人の注意を惹き始めて人を怖れしめ始めて論者を呼び起すに至りたり余輩目下教育に従事し我學生を薰陶するの際

於ていまだ曾て生前の教育の必要を感せざる日はあらざるなり試に今百有余名の學生を聚め此が身體の強弱、靈性の智鈍を判別し而して其差異ある原因を探りみるも或は家庭の教育に因するものあり或は友人の善惡より由るものあり或は從來薰陶者の主義性質の如何より基するものありと雖も要するところ生前の教育此が最大原因たることを發見するなり

此れ惟しむる足らざるなり其理まことと明瞭なり凡そ生とし生るもの魚鳥禽獸植物類に至るまで悉く皆然らざるはなし、良き木菓にハ良木を生じ惡き種子ハ惡樹を出す、あは今更に云ふまでもなく近來牧畜業のひらくるハ従ハ人工をさへ交へて巧みハ精良の牛馬を産出せしむるとあ

るハ至れるを觀て知るべし、左れば今人類ハついで其實際を觀察するハ齒の弱き人の子は齒また必ず弱く眼のわるき人の子ハ其眼亦た從てわるし其面黒きハ其肌白きハ其丈高きハ其軀低きハ其親を見バ其子を知るべく其子を見れば其親を知るべし、嘗に其邊のみととまらず茲ハ傷怖るべき事實あり我之を醫士ハさけり彼肺症癩疾の如きハ謂ふまでもなく凡そ疾病と云ふ疾病の中その十の七八ハでハ所謂の遺傳ハ由るものよて特ハ重病不治の病ハ十中の七とも謂ふべきなりと其れ然り果して然るか之を教育上ハ移すときハ實に重大なる問題ならずや蓋し教育上第一のものは體育なり如何に精神ありと謂ふとも相勝がたきものハ疾病なり假令ハ學業進歩するとも

病人は何の益あらんや、況してや肉體の疲勞の精神の疲勞となり勉強は堪へがたきはざるの病の身への進歩の望なきに於てをや、然れども茲に一ツの難題あり凡そ生後のものととりての藥餌も無きならず體操も無にならず衛生の設また無にならずと雖も既之を遺傳と云はんか性來と云はんか生前に在りと云はんか抑之を不治のものなりと斷定せんか棍棒も用なく防濟も用なし石礮の瀧も撃るゝども黒奴の色の變ずる術なく如何も苦心して様子するともおかめの鼻の今更隆くなる法はなきあり然らば則ち如何すべきか曰く生前の事之を生前も禦ぐべきのみ生前も禦ぐ如何もせば可ならん曰く我所謂る生前の教育即是なり

且又靈魂の由來について其議論頗る驚すしく天の都度と直接に人は賦與するものなりといふ古來一般の説なりしかども近來遺傳法の明かなるに従ひ此説漸く勢力を失ひ、一種不可思議の理法より親子承傳すとの新説の否、新説にあらずと雖も此説實に勢力を復し殆ど新説の裝飾して學者の間で用ゐられんとす、其は先づサテオキ兎も角も此は熱々考ふるに蛙の子に蛙なりとの諺に獨り其面貌を云ふにはあらで其動作進退をも併せ含めて指すにあらずや或所は俗に所謂る頼間なるものあり而して其子宛然之に類せり又或所は奸獍蝮蛇の如きものあり而して其子全く之に類せり思ふに斯る例證の多く重ねるに及ばざるべし世間ありふれたることなればなり、人の謂ふ此は生後の

教育に由ると然り然り生後の教育の必要なる余輩とても知らざるよあらず又其遺傳の悪性とても生後の教育の如何に由りてハ必ず改まらずと謂ふにハあらず揚墨肢糸の感慨ハ余も亦た同然たるべしと雖も彼を以て此に歸し性來如何を無にするものハ其ハ教育を語るよ足らず余輩よりして之を觀れば生前の教育ハ十の七八の部分を占め生後の教育ハ僅ハ其二三に居る然ばこそ同じく熏陶する學生の中よも一を聞て十を知るあり十を教へて一をも悟らぬ愚物もあるなれ惡を見て善ハ歸り善を見て惡ハ入るなと其規決して一ならず其學藝の進歩の模様殊ハ其人物に至りてハ性來よ由るとより外思ハれざるなり若し夫れハアリストートルをして穴居民中よ生れしめよ二三を數ふ

るとさへ能はずして其一生を終りしなるべしとの生後教育家の常ハ依て以て誇るところの語句なりと雖も然ればとて又俗ハ所謂の間拔をしてフレト一の門ハ入らしめハ果してアリストートルを凌ぎ得べきか之を要するに生後の教育あるものハ既ハ備はりたるものを引き出すに在るなり既ハ抱ける玉を磨くハ在るなり而して其質たり性たり人たり犬たるよ至りてハ全く生前よかゝるものなり彼の未なり此ハ本なり同日の論にあらざるなり人又謂はん瞽瞍に舜あり堯ハ丹朱あるハ如何と曰く遺傳法中にも亦隔時傳と云ふものあるを忘るべからず其父親より傳はらずんバ其母親より傳はるもあり其父母よりして傳はらずんバ其祖父祖母よりして傳はるもあり或ハ遠

く數世の古昔を引て俄に別性を再現するもの往々なきも
あらずと云ふ唯それ人の子と生れ來て更に遺傳のなきも
のは天下一人もなかるべし

然れば如何肉體及び靈性すら既に遺傳に由るものとせば
生前の教育の必要なるもの最早や説明を重ねるまでもな
しと雖も茲に猶ほ一ツの問題残り即ち罪惡の問題なり
思ふに此問題を分け入りて其因果の門を叩かば則生前教
育の問題は天堂地獄の中間に横るものにて人をして悚然
として惕れしむるものたるを見ん蓋し肉體の罪惡に於る
頗る關係あるものなり、腦に病あるもの、兎角に信を履み
難く胃に疾あるとき、おの自づと怒を起し易し、信を履まざ
るとを喜ぶもの、あらず怒を起すとをば敢て好むにあらず

と雖も肉體の疾病内より之を驅ればなり、同じ放蕩の罪惡
なり、然れども多血性の人、於ては貧血者より怒すべきあ
り何とあれば其慾を制すると難ければなり、肉體の疾病、多
血の性、其罪果して誰に歸すべき、加之之を靈性に移し來り
て熱々之を考ふる、一層肉體より甚しきものあり、奸獍な
る者の子の奸獍なる貪慾なるもの、子_の貪慾なる酒癖あ
るもの、子_の酒癖ある之を果して遺傳と知らば其罪誰に
歸すべきぞや子に歸せんか親に歸せんか抑や又之を祖先
に歸せんか、虎狼人を喰ふ然れども是れ虎狼の罪にあらず
其性の然らしむるところにあらずや、良しそれ人の獸類に
あらず自由道德の動物なれば一舉一動自ら其責に任すべ
しといふもの、又憐れむべき次第ならずや、嗟吁汝遺傳

の理法よ、汝は知らざる罪を我も負はしめ我をして一生病
 床に呻吟せしむか、好まぬ罪を犯さしめ永遠地獄に墮さし
 むるか、と天を怨み親を咒ふて憂世を渡るものもあるなる
 べし

其れ然り然れども其も亦た益なし若し夫れ宇内に神あり
 とせんか必ずや深き道理のあるるべし豈何ぞ人よ怨ま
 るゝ事をなし玉ふべき又若し宇内よ神なしとせんか猶更
 怨みても甲斐なきにあらずや左れば知らざるの知らざる
 となし、知らぬの自然の王に任せて只た之を惕れ怖れて茲
 よ知れたることをば行ふべきのみ、知れたるとい何ぞ曰く生
 前の教育即是なり

即ち生前の教育といの前述したる事實を悟り遺傳理法の怖

るべきを知り、禍害を傳ふる代よ福徳を傳へ惡癖を移す代
 よ善心に移し、疾病を與ふる代よ健全を與へ鈍性を讓る代
 よ發明性を讓るを謂ふよ外ならざるなり、世よ此まで天
 性とか天賦とか稱へて都て靈魂より其肉體までを全く天
 の授くる者とし人の關せぬ様よ教へしと雖も何ぞ知らん
 遺傳法よりして之れを視れば彼所謂る天性天賦なるもの
 も多くの皆親性親賦たるを彼佛者の所謂る輪廻とて畜
 生なんどの更生は一笑よ附して去るべしと雖も親子代々
 の因果に於ての暗よ遺傳法よ符合するあり思ふ井上圓了
 氏をして一度此よ氣附しめば得たり賢とし此ぞ佛法が學
 術よ適ふ儘かな證據と筆かどつて書き立てく一卷の書
 物忽ち新聞の廣告よ井上大先生の大新著と出でもやせん

と思はるゝなり、其のさて措き以前の道理を知らざるよりして世人往々意見を謬り其子に悪性のあるを認め、悪しきものよと之を詈り教へて以て改まらざれば前世の因果と之を諦む何ぞ知らん其の汝の子を罵るゝ即ち汝を罵るゝよて其所謂る前生とい即ち汝が身よてあるとを感へるも亦甚しからずや

然れば世の人よ汝兩親の遺傳を咒ふか願くゝ汝が子をして復た汝を咒はしむるとなかれ汝子を愛するか願くゝ不品行を謹しめよ、不養生を謹しめよ汝の心傾を謹しめよ汝酒色よ沈溺し放埒よ其身を壞さんか乃ち汝如何なるものを其子よ譲ると思ふや、肉よ酒毒梅毒の毒血を譲り、靈よの放蕩邪侈の悪性を譲らざるを得ざるなり、汝既よ毒を自

ら其子に飲ましめたるよあらずや何ぞ今更其子の病を悲しむぞや汝自ら放蕩の性を授けたり何ぞ今更其放蕩を譴責するぞや、果して其子の健全を祈るか然ば毒血を其子に譲るべからず、汝子の善良ならんとを欲するか先づ汝より善良となるべし、子が汝よ需むるところも亦た是よ外ならざるあり、汝が其子よ譲るべきもの、金銀寶石の遺物よあらず、汝か健全なる肉體と汝が美性の遺物なり、生後の衣服の心配よあらず、生前の教育の心配なり、試よ汝が兒童を觀よ其容貌聲色より動作進退よ至るまで善くも汝よ似たるかな、斯て又其兄弟を觀よ同じ兩親より生れながら其性情同じからず其容貌の異なるゝ抑も如何なる故ぞと思ふや復た余之を醫士よ聞けり凡そ親の學問よ志ざせしときよ

生みし子の多くは皆學問を好み、親の殺生を好みしときも生みし子の亦た多くの殺生を好むと果して然るか余之を知らず唯だ遺傳法より推し考へて乃ち之を信ずるのみ、嗚呼嗟吁世人よ誠よ其子を愛するならば請ふ生前よ之を愛せよ人生禍福の大根源は即ち生前の教育に在るなり

◎有功の德育

小崎 弘道

昨年十一月の頃よやありけん、加藤弘之氏が德育は宗教よ據らざる可からざるの法案を發せしより、教育會雜誌并びよ「ジャバンメール」よ之れを論じ、近頃又た教育會の總會よて此の問題よ就て討議ある由なり、德育の一問題の目下我

か邦急要の問題にして、之れが適當の解説を得ると否ざるとい、人民の安危に關する實よ少々よあらずと云ふ可し、偕て我邦學者の德育よ關する意見を觀察するよ、維新以來其說屢變更あるを見しも、其意見の漸次進歩の傾きあるの喜ふ可き事なり、其始め各府縣よ諸學校を設くる時代に於ては、教育の主義の、全く智力開發主義よして、智力さへ開發すれば、別よ道德を教へるの必要有らざるとの意見なりし、當時新聞に演説に、學者の論する所を見るよ、我か邦よ於て最も不足せる者の、智力の一よして、智力さへ充分開發すれば、泰西諸國と格別の優劣を見ざるが如く思惟せり、而して其道德と爲す者の、専ら智識よ本つく者と爲し、人の惡を爲すず、善惡正邪の別を知らざるよ依り、誤つて惡よ陷るる者と

爲せり其説たる儒教の道德主義に髣髴たる者にして、脩身の本の致知格物に在りと爲す者なり、又た希臘の哲人ソクラテースの説に似たる者にて、智識即ち道德と爲す者なり、此の説たる實際に照し不都合なる所少なからず、道德の觀念たる素より智識の力に據らざれば、之れを了知する能はずと雖も、道德心と智識といふ全く別物にして、智力大いなるも、道德の觀念必ずしも盛んならず、是れ智者學者にて、不道德不品行を極むる者多き所以なり、智力主義の道德説一時旺盛を極めしも、實際に徴して不充分なる所多きが故に、教育に従事する者皆な其説の不完全なるを感ずるに至れり、故に明治十五、六年の頃に至りては、社會の反動と共に儒教主義の道德再興し、道德の教育の專

ら古人の嘉言善行を以て本と爲しとの説勝を占むるに至れり、儒教主義の道德の、智力主義の道德と其根基を共にする事あれども、儒教主義の理論より寧ろ聖賢の軌範を重すれば純粹の智力主義に比すれば、實際に於て幾分かの効力ありしが如し、然れども儒教主義の道德たるや、本と封建時代の特別なる社會の形狀に養成せられ、唯其特別なる社會にのみ適用すべき者なれば、素より之れを以て文明の社會を行ふを得ず、其今日の道德に適用す可からざるや、論を待たずして明かなり、

儒教主義の道德の一時反動の潮勢に乗して其流行を逞ふしたるも、泰西文明の新主義に抵觸するが故に長く其勢を保つ能はずして忽ち廢棄に属したるが、爰に新たに見れ出

てたるの、一種奇体なる德育主義にして、即ち彼の所謂躰育主義の道德是なり、此の躰育主義の德育たるや、慣習の力を以て道德を教へ込、それを無言の間たゞ行ひしむとの義なり、此の主義たるや、彼のアリストートルの道德説も髣髴たる者にして、アリストートルが德育は、猶ほ植木屋が樹木の曲れる木を添へ木して矯め直すが如しと云ひしと同主義と謂はざる可からず、此の德育主義たる、智力主義の德育主義に比すれば、稍々進歩せる者にして、斯る方法たる德育の上へに於て、幾分かの効力なしと云ふ可らざれども、未だ以て完全の德育法と謂ふ可からず、何となれば人の自由の意思を有する活物なり、器械的の法則を以て之れを拘束矯正す可からず、又道德なる者の、其品行より寧ろ其心意に關す

る者なれば、其源とよ溯はつて道德心を養成し、其源とを改むるも非されば、假令ひ幾分かの功驗あるにせよ、真正の道德と云ふ可らず、近頃に至り德育の法案に就き種々の議論起るあるも、畢竟是れ現今の德育主義に人々の不満を抱くの實證にして、我國德育主義たる、猶ほ學者の考案中なりと云ふて可なり。

近頃よ於て德育の宗教に據らざる可からずとの議論盛んなるが、是れ道德上よ於る我か邦學者思想適當の發育にして、其説愈よ實際の眞理よ近づくを證明す可し、德育の事たる、第一道德の原理に關する疑問あれども、此の他日よ譲り、茲よ専ら如何なる德育が最も効力あるや、有効の德育の如何よす可きか、是れ等實際の問題よ就て講究せんと欲す

三十四
徳育をして効力あるものど爲さんには先づ其情感を訴へ
る者たらざる可からざるに明白なり詩人ホーブ曰く道理
は帆として情感の風あり船に帆を擧ぐるも風無くんば船
を動かすと能はざるが如く吾人道德の理を如何に明かに
悟るも情感無くんば其道德を執行する能はざるなり是れ
有効の道德の必ず宗教を據らざる可からざる所以の理
なり宗教の其關する所智情意人性の全軀に在るも其最も
働きを與ふる所の情感に在りとす殊に基督教の如きに至
つては其主とする所愛の一字に在れば人心を動かすに最
も力ある者なり徳育の情感を據らざる可からざるの一事
は實際教育に従事する者の實驗する所にして其學量に示
すは道德の學理を示すも何んの益あらざれども若し義士

仁人の言行を話すとき之れが爲め幾分の感化を施す事
あるを見る又徳育にして有効なるものは其道德に於て權威
なかる可からず責任無き法律は徒法に属するが如く權威
無きの道德の人心を支配する能はざる是れ道德の執行に道
徳の大法を掌るは人間以上の者に存するとの信仰必要な
る所以なり論者或は云はん吾人既に善惡の感覺ある良
心を有す又た何ぞ外に道德の大法を掌る者の存在する信
仰の必要あらんと良心が吾人の道德を維持するに於て幾
分かの力を有するは明白なれども其良心たる人々も依つ
て強弱暗明の差無き能はず道德家の良心の其働き鋭敏よ
して且つ力有るものなれども不品行を極むる惡漢も於て
は其感覺甚だ微弱にして且つ遲鈍なり其惡行を止むるよ

於て、何の効力も無き者なり、且つ道德の高尙なる者も於ても、良心の力獨り吾人の道德を維持す可からざるは、凶變逆遇に對して其心動くことあるを以て明かなり、吾人平常危難を受け、又た試み遇はざるの時、於て、良心の力或は吾人の品行を維持す可しと考ふる者あれども、一旦危難は臨むか、又た大いなる試み遇ふ時、之れが力猶ほ微弱なるを覺ゆ、是れ吾人の上も吾人を支配し、善惡の大法を掌り、正邪を賞罰するの主宰あるの信仰必要なる所以なり。

此の道德は權威を與へ、人の感情を訴ふる所の者は、宗教は據るに非されば、到底望む可からざるの事なり、然れども論者或は云ん、宗教の道德の有効なる論を待たされども、唯

た其劣等なるを如何せんと、我か邦よて、宗教なる者の、率ね愚夫愚婦の信する所にして、其事たる甚た卑しむ可き事多かりしか故、泰西の宗教も亦た斯くの如きものかと思ひし、宗教の道德の高尙なるを知らざる者多しとす、宗教の道德の高尙なる、到底他の道德の及ばざる所なり。

第一 宗教の道德の内より始め、又た其源とより清くする者なり、聖經は曰く、神曰く我れ我か律法を彼等の内も於て其心の上も記さんと、宗教よて、道德外に在るも非す、内に在り、其善を爲す、善の爲す可からざるを知り、力行して善を爲すも非す、其心既も善となり、好んで善を爲すあり、是れ宗教の道德の遙か、世俗の道德に優れる所以なり。

第二 宗教の道德は自由なり、凡る道外も在れば、之れも從

いざる可からざるの念あるにより、多少之れが爲め檢束せられざるを得ず、是れ道徳が動もすれば人心を束縛し、之れを卑屈よ爲すとある所以なり、去れを宗教の道徳の然らず、基督曰く、汝曹眞理を知らん、眞理の汝曹よ自由を得さず可しと、吾人既よ神人間の眞理を悟り、上帝の意と我か意と合同し、彼我其感情を別よせざるときは、其爲す事、言ふ事、一として道理よ適いざるいなし、我か意と道理と違ふとあれば、之れに屈服せざる故、之れが爲めよ不自由を覺ゆることなれども、其心自然よ眞理に従へば更よ不自由を覺ゆることなし、又た自由の存する所よ、喜びあり、世人率ね道徳を以て不愉快なる者の如くよ感ずるとある、其心道徳の大法よ合致せざるが故、之れよ束縛せらるゝの感あればなり、其心

既よ自由よ道徳の理法に従ふとき、其道徳を爲すや決して不愉快よ非ず、愉快よ之を爲すとを得可し、又た自由の在る所よ、平和存す、是れ其心自由よ眞理に従へば、其心よ波瀾を覺へざるよ依る。

第三 宗教の道徳よ、安心有り、普通の道徳よ於て、其道徳と我か心と別あれば、多少之れよ軋轢無きを得ず、而して其道徳を破る事あれば、必ず其心に不安心を覺ゆ、又た己に之を犯せば、之れを癒するの道無かる可し、去れを宗教の道徳よ於て、道徳の大法の、上帝の意にして、上帝と吾人との父子の關係ある者れば、若し萬一其律法を破る事あるも、再其罪を謝し和くよ途あり、是れ宗教の道徳よて、常に其心よ平安を覺ゆる所以なり。

第四 宗教の道德よての、其理想たるや上帝に在りとす、其目的とする所、永遠無窮なる完全無缺の上帝に在れり、吾人進んで退くを知らざるなり、世の道德よての、多く古への賢人聖人を以て其目的とすれども、人間たる以上の、一として完全なる者も非ず、其不完全なる者を以て之れが標準と爲すとき、到底高尚なる道德に進むを得ざるあり、去れど宗教の道德よての、嘗たよ上帝を以て其標準と爲すのみならず、常よ上帝と交通し、其感化を受け、又た我か心の上帝に在り、上帝の心の我よ宿り、神人合一なるに至る、是宗教の道德の最も高尚なる處なり、

宗教の道德の高尚なる所、凡そ斯くの如くなるが、此の道德の、強ち學者智者のみ適用す可きも非ず、婦人も、小兒も

も、又無智無學の者も、之れを守らしむるを得、是れ宗教の道德の大いよ他に優る所よして、蓋し之れ有るの信仰の一事に據る、醫藥の醫學に明かなる者と、更よ醫學の理を知らざる者と、其人の智愚賢不肖よ據りて、効用を別よせざるが如き、宗教も亦た其人の學不學賢不肖に據りて、其働きを別よせざるなり、要の唯た信仰の一事よありとす、然れども學有り智有る者の、多く醫藥の効用及び其學理を聞て、而して之れを服するとあるが、宗教も亦た其學理を極めざる可からず、真正の宗教の、如何なる人も適用するなり、決して唯た無學の徒のみ効用を爲すも非ず、學者智者にも其効用を同ふす

以上宗教の道德の有効なる事を論したるが、之れを學校に

應用するの一議に於て之れを別問題なりとす、學校の政
府と直接の關係を有する者にて、歐米諸國其教育に於て、種
々の異論無き能はざる、獨逸の如きは、其學校の教育専ら宗教
を本とす彼の宗教の最も盛んなる米國の如き、之れを以て
幾分か宗教と分離せしむるとあり、然れども米國も亦、近
頃小學校に於て宗教の原理を薰陶す可きの議論愈よ盛ん
なるを見る、昨年六月刊行の「アンドウヴァオルレビエウ」に於
て、米國マサチウセツト州の州立師範學校の教師グリーンノ
ー氏の、小學校に於て教育と宗教の相分つ可からざる事を
論じ、左の言を爲せり曰く、假りに智力の教育を以て公立學
校の目的と爲すも、其生徒は人類の高尙なる目的として宗
教上の眞理を教訓す可き必要あり、去れど智育の唯た情感

と意志の働きの手段として、道德及び宗教上の働きを全ふ
するに於て、其最も高尙なる目的を達すと云ふ可し、故に智
力の教育も宗教の教育も及ぶにあらざれば、決して完全な
る者と云ふ可からず、又た曰く、吾人の道德及び宗教の主意
を開發するにあらざれば、教育の効用は實に小なりと云ふ
可し、又た公立學校を以て一國の爲めに存在すると爲すも、
宗教の教育は、國民たるに必要なり、何れの國にても宗教無
くして、其國礎を固ふしたる例証は、歴史を見ざる所なり云
々

我が邦の諸學校も宗教を用ゆるの一義に就て、論ず可き
所少なからざれども、是れは他の問題に屬するを以て、他日
之れを論究するあるへし

○孔子の教

大西 祝

孔子の春秋の末に生れ先王の法度の廢れたるを嘆じ當時の亂世をバ堯舞禹湯の治世に挽き回さんとしたり其事業は開新に在らざりて寧ろ復古にあり創始に在らずして寧ろ傳舊にあり中庸の仲尼祖述堯舜憲章文武といひ又孔子自ら述而不作信而好古竊比於我老彭と云へり釋迦が印度從來の民族門閥の懸隔を毀ちマホメットが亞刺比亞從來の偶像教を排撃し獨一全能の「アラ」を説きて社會の秩序を一變し人民の信仰を一新したるが如く大膽雄偉なる事業の孔子の以て自ら任したる處にあらず孔子の専ら先王

の教を遵奉して天下を治むるよりは之を増したるものなく世を救ふの福音の全く五倫の教訓にありと思惟したり此の如く孔子の管は古の聖王を祖述するに止まりて己の獨得一派の道を開きしに在らざるに支那人の特に之を仰いで大聖先師と尊稱するに抑もまた何故ぞや他なし孔子の眞に希世の人物なりしが故なり孔子の支那人中の支那人なりしが故なり幸我が以て予觀於夫子賢於堯舜遠矣と云へるに決して過言にあらざるなり孔子の實に支那思想の中心なり孔子は一手に支那の古を掲げ他手にて支那の後世を指揮したり

孔子曰、苟有用我者、三月而可已也、三年有成、孔子が四方に流浪して喪家之狗とまで呼ばれしに蓋し我は天下を治む

るの枝備ありと信じたるが故なり我言を用ゐ我道を布かば再び堯舜の治世を見んこと恰も掌を指そが如しと信じたるが故なり、上古より支那の君主獨裁の國にして萬乗の天子若し人君たるの度量あるとき、容易く天下を其掌中と運らし得べく、若し王室衰頽して天子空位を踐む時の諸侯各々思ふが儘、其封土を支配して素より毫も君主を箝制するの機關なければ下民を撫育するの手の動もすれば之れを虐ぐるの腕と變じ、孔子の時代は於ての聖天子上も無かりければ齊桓晉文の輩出で、天下も覇たれり此時も當り孔子の何れも由りてか下民を福ひせんとしたる何の手段ありてか君主の威暴を制禦せんとしたる孔子の素より近世文明政治の機關たる憲法を知らず代議の制度を知ら

ず孔子の唯一の手段ありしのみ道德即ち是なり苟くも國家の大權を帶ふる者の有徳の君子ならざるべからず、君權は君徳と分離しての存立すべき者もあらざと説きたるの孔子が政治論の主眼なり孔子の徳を先とし法を後にして當時の諸侯に責むるも専ら君徳を修むるとを以てしたり論語を讀むも季康子問「政於孔子」曰「如殺無道以就有道」何如、孔子對曰「子爲政焉用殺、子欲善而民善矣」とあり又曾て同人の問に對へて政者正也、子帥以正、孰敢不正と云ひ又同人が盜を患へて之を平治するの道を尋ねしに孔子對曰「苟子之不欲、雖賞之不竊」とあり又子曰「爲政以德、譬如北辰居其所而衆星共之」とも見ゆ之を要するも上に仁君あらば下自から仁も化し、治國の源は單に君主佐相の身ありて其人存

則其政舉其人亡則其政息と説けるなり、されど如何にして其人を得んか暗君汚吏兎角多くして明君賢相至て稀なり下民のたゞ聖天子の出づるを待つの外なからんか幸よして明君上よあらば衆民或は鼓腹して太平を歌はん然れども君を父とし民を子とするの政治なれば人民の小兒の父母に依頼するが如く恐くは萬事を明君賢相よ放任し其膝下よ安坐して恰かも眠ひれるが如くならん是れ東洋風の太平樂なり孔子の政の未だ上古の家長制の風を遺すものと謂ふべきなり

孔子天下の亂れたるを憂へ身を挺て、久しく魯齊陳衛の間よ奔走し而して其死時よ近づくや既往を回想し嗟嘆して曰けるは天下無道久矣、莫能宗予と孔子の事業の失敗と

曰のざるを得ずされども其失敗なるを以て孔子を誘る勿れ大人の事業の往々失敗ならざるを得る其當世よ失敗するの永く後世を支配する所以あり政治家輩は孔子が政治説の迂濶なるを笑はん孔子の政治説固より迂濶なり支那人いつまでか堯舜の民ならんや然れども其執權者修身の必要を説きたるの之を迂濶とのみ見過すべからん今世の帝王宰相政事家等の大に自省する所あるべきなり執權者が品格の上よ於て國民の模範となるとの無用なる事なるか堯舜の後支那に再び堯舜の世なく孔子の政教論の寧ろ無効よ屬したるが如しと雖も其實決して然るよあらず其論の爲よ支那歴代の君主の壓制を障碍したると尠々よあらざるべし知るべし孔孟の仁義の教を除きては他よ毫

も君主の威望を箝制するの途なかりしとを左の一話を讀みてい王侯も少しの自省する所ありしなるべし

孔子齊に適かんとて泰山の側を過ぎけるに野に一婦人あり哭する聲いとわかれなり子貢をして其故を問はしめけるに女答へて曩も我舅、虎も殺され我夫も殺され今また我子も殺されよきと云ひけるよと子貢いふかりて左らば何故こゝを去らざるかと問ひけるに女曰無苛政、

子貢其趣を師に告ぐ、孔子曰、小子識之、苛政猛於暴虎、齊の景公政を問ひしに孔子對へて君君臣臣父父子子と云へり孔子の政治説の其基、五倫の教あり中庸も君臣父子夫婦昆弟朋友を天下の達道と云へり孔子の社會の關係を類別して此五者となし社會の治安の人々此五個の關係を

守るに在りとし人の此世に生るゝや其義務とする所此五個の關係を完するの外なく人の道とすべきの遠く之を外に求むるに及ばず此關係の中に求むべしと爲したり而して此五個の關係の如何なる者ぞと尋ぬるに臣子婦弟の君父夫兄に服従すべし君父夫兄は仁愛を以て臣子婦弟の服従に應ふべし朋友の相互に信義を以て交るべしと云ふにあり且つ孟子の堯舜の道の孝悌のみと云ひ又有子の言も孝弟也者其爲仁之本與ともありて右五個の關係の中にも殊に孝悌を貴びたること明けし此の如く殊更に孝悌を重んじたるは蓋し人生の教育の家庭の内を殆まりて四海を保するの大徳も家庭内の美德を以て廣く世に推し及ぼすに在りとの意も出でたるなるべし人或の思へらく五倫の道

よれば、妻子は恰も奴隸の位地を占むる者なりと是れ太
 だしく孔子を誤れるの説と謂ふべし孔子が孝貞の教の支那
 人の後を思惟したるが如く苛だしき者にあらず只其苛だ
 しきに到るの傾向を有したるのみ例へば孔子が子道を説
 きて事父母、幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨と云へるなど
 の今時の人も敢て非難する所なかるべし又易に夫婦の位
 地を論じて女正位乎内、男正位乎外、男女正天地之大義也と
 いへるの歐米人と雖も恐くは間然する所なかるべし又夫者
 扶也妻者齊也なを解して夫の妻を扶け妻の夫と齊しき者
 との意を云へるの殆ど吾人をして其東洋人の語なるかを
 疑ひしむ又孔門は縁ある荀卿は子道篇を作りて入孝出弟、
 人之小行也、從道不從君、從義不從父、人之大行也とまで斷言

したり固より孔孟の男女有別説の著しく男尊女卑の傾向
 したるとい疑を容れを而して其傾向の遂に後世支那日本
 に見る所の現像をば出現したり遂に詩人をして人生莫作
 婦人身、百年苦樂由他人とまで歌ひしむるに至れり且つ吾
 人が支那日本の爲に悲嘆して止まざるの一事あり即ち孔
 子が明に一夫一婦の則を説かば妾を蓄ふるとをば禁せざ
 りし事是なり吾人の知る孔孟の道は以て夫婦の間を福ひ
 るし社會の腐敗を洗除するに足らざるを

孔子の徳行を談するや多くの時と處より從ひて其教訓を斟
 酌し敢て一定の綱目を擧げず且つ力めて偏頗奇異の行爲
 を嫌ひたり論語より子以四教、文行忠信と見え又子曰君子
 義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之とあり又或處より子

曰恭而無禮則勞、慎而無禮則蕙、勇而無禮則亂、直而無禮則絞、
 とあり又或處よの知及之仁不能守之、雖得之必失之、知及之
 仁能守之、不莊以蒞之則民不敬、知及之仁能守之、莊以蒞之、動
 之不以禮未善也と見へ又或時の君子依乎中庸とも云ひ又
 中庸其至矣乎、民鮮及矣とも云ひ又吾道の可もなし不可も
 なし又無必無固とも云へり此等の語よよりて見れり孔子
 は一徳一行よ偏するの弊を戒めて衆徳百行の調和を貴び
 中庸よ過不及なき處を踐み守るべしと教へたるなり此の如
 く諸徳を擧げて之か調和を貴重したる中よも仁義禮知若
 しくの知仁勇の三四の徳をハ尤も重じたと明なり中庸
 よの知仁勇の三徳を天下の達徳と云へり徳行を此三種に
 分ちたるハ此頃西洋の心理學者が心の作用をば知情意の

三つに分別すると相應する所あり孔子の主意とする所蓋
 し人心全躰の發達を圖るよありしなるべし且つ其殊よ學
 問を重じて徳行を立つるよの學ばざるべからずと教へ又
 音樂を貴重して人心を治ひるよ大功あるものと爲したる
 ハ蓋し道心と知情の關係よ注目したる者ならん論語よ曰
 く好仁不好學其蔽也愚、好知不好學其蔽也蕩、好信不好學其
 蔽也賊、好直不好學其蔽也絞、好勇不好學其蔽也亂、好剛不好
 學其蔽也狂と此の如く學問を重じたるの思想の發達して
 遂よ大學の説となれり大學よ其心を正しくし其意よ誠よ
 せんと欲せば先致其知、致其知在格物と云へるハ正しく罪
 惡の無知より來ると云ふ一種の哲學あり宋儒此意を得て
 爲惡之人未嘗知有思、有思則爲善矣と

孔子の道の多端にして歸一する所なきや一以て衆徳を貫き百行の準則と爲すべき者なきや孔子曾參も語りて曰く吾道一以貫之と其一の何を指して云へるか曾參の之を解して夫子之道忠恕而已矣といへり又子貢か有一言而可以終身行之者乎と問ひしに孔子答へて其恕乎己所不欲勿施於人といへり然らば忠恕の二字をもて孔子の道を蔽ひ得べきか左れども中庸も忠恕違道不遠とあるを見れば忠恕の孔子の道を盡す者なりとい思ひれず且つ孔子か子貢も語りて仁者己欲立而立人己欲達而達人能近取譬可謂仁之方と云へるに恕己欲立而立人云々の即ち恕の意を云へるなりを以て仁に至る適切の方法となしたるも過ぎず是を以て古來學者中一貫の一をば仁と説きたる説多し

且孟子に孔子曰道二仁與不仁而已矣とあるを見れば一貫の一をば仁と説くの説或に當れるも近からんか何様孔子の明ある説明なきをもて其意の確との知り難し先假に孔子の道より一以て之を貫く者ありて其一の仁なりと定め置かん然らば其仁との如何なる者なるか是れ古來儒者輩か腦漿を絞りにて推究したる問題なれども一人として満足すべき解釋を爲したる者あるを見ず且つ其解釋の様々なる猶此上より新發明の解釋もあるまじく思ふ許なり例への或儒者董仲舒の仁の天心なりなど漠然たる解釋を爲し或學者賈誼の兼愛人謂之仁と云ひ或學者袁宏皇侃韓愈の博愛之謂仁といひ程伊川の愛情仁性といひ又仁道難言唯公近之また生之性便是仁といひ張載の靜を仁の原とし禮

義を仁の用とし楊龜山の萬物與我爲一を仁の躰とし上蔡謝氏の生活知覺を仁となし朱子の無私欲而後仁、また若能到私欲淨盡天理流行處皆可謂之仁といひ又仁を解して心之德愛之理と云り且つ宋儒の總して仁は躰用の區別及專言偏言の區別を立て、未發の初に具はるを仁の體とし已發の際に見はるゝを仁の用とし義禮知信を包含して云ふを專言の仁といひ義禮知信を對して云ふを偏言の仁と云へり我國の儒者中も仁の解釋を試みたるものあり或者(物徂徠)の仁者謂長人安民之德也と云ひ又或者(大田錦城)の仁者唯是善也、衆善可以稱仁、衆善可以入仁、仁者善之宗也、衆善仁之細也また衆善是仁、與道德同と解釋したり邢昺が論語疏に仁者善行之大名也と云ひ孔安國が論語の爲仁由己而

由人乎哉の語を解して行善在己不在人者也と云へるを見れば仁を善なりと説くの説古人中もありしを知るべし仁の説の此の如くまろくなるの蓋し孔子が判然たる解明を下さざりし由るなり孔子自ら仁よつきて言へる事少しも一定せし論語よの子牢言利與命與仁と見へたれども孔子が仁よ付きて言へる所少からし子曰仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣また有能一日用其力於仁者矣乎我未見力不足者也蓋有之矣我未之見也とありて仁の左まで得難き者にあらざる様なれども當代の名賢を評して焉得仁、又の不知其仁といひ又若聖與仁則吾豈敢と云へるを見れば仁の當代の大賢も得る能はず孔子も敢て居らざる所よしていと得難き者の如く思はる。樊遲問仁子曰愛人、こゝよの愛を云

へり、仲弓問、仁子曰、出門如見大賓、使民如承大祭、已所不欲、勿施於人、こゝの敬と恕とを云へり、樊遲問、仁子曰、居處恭、執事敬、與人忠、こゝの恭敬忠を云へり、子張が仁を問ひし時に、克己にの恭寛信敏惠を以て答へ、顔淵が仁を問ひし時に、克己復禮を以て答へ、また或時樊遲の仁者先難而後獲、可謂仁矣と答へ、又或處の仁者其言也訥とも見へ、又剛毅木訥近仁とも見へ、又巧言令色鮮矣仁とも見ゆ、此等の數語を合せ考ふるよ(或人の思ふ如く)上より下を保愛するの一事を以て仁の意義を總括し得可らざるが如し、此の如く彼或の此の一徳を以て仁を説明し得ざるが故に、儒者中仁を解して衆徳萬善の統名なりと云ふ説あり(博學なる宣教師且つ支那經書の翻譯者として世に知られたる英人レッグ氏

仁を譯してポルフエクト、ザオルチユ一即ち完全なる徳と云へり)されども此説に従へば仁の衆徳を統ぶるの名よ止まりて衆徳を貫く一の者を指して謂ふよ(あらず譬へば仁の百錢を貫く一索子よ)あらずして百錢を名づけて一兩と云ふ其名よ過ぎず且つ仁と道德とを(大田錦城の如く)同意義なりと見なすの其誤謬あると明なり何となれば經書よ所謂ゆる徳の其意義太だ廣くして例へば智をも(大徳と見なして)其中よ含有すれども仁の意義中著しく智の徳を含めるの例證あるを見せ、前よ云へる如く孔子の仁に判然たる定義を下したるとなれば到底確とい之を解し得ざるべし左れども仁の愛の意義を尤も重しとし而して之よ到る適切の方は恕推己及物之謂恕なりとまで解明

して過ちなかるべし試み猶判然たる定義を下さんとならば仁の善(グード)をなすの謂なりと謂ひ或の當れるも近からんか而して善とい何者ぞやと問ひ善の終極の思想よして解釋するを得ずと云ふの外なかるべし或儒者の思へらく聖人の道の多端なり一以て之を盡し之を蔽ふ者なし孔子が主として仁を説きたるの仁の衆善の長諸徳は冠たる者なるが故なり且つ我道一以貫之と云ふるの其意我道の仁なる一のものをも尤も重んずと云ふも過ぎを是れまた一理ある説といふべし到底確と孔子の意を得んと覺束なし孔子が明瞭に仁の意義を解釋せざりしは實は遺憾の至と云ふべし予の竊かに孔子が仁の字を判然たる定義を下し得しかを疑ふ孔子の道德説の之を一

派の道義學とし見る時の漠然たる事曖昧なる事模糊なる事のみ多し

孔子の道德説の學理の上にて不充分なるのみならず世を救ふの實力は於ても大に乏しき所あり何となれば其教の上より下を指圖するの教よして下にありて匹夫匹婦と苦樂を共よして之を高むるの教は非ざればなり孔子の位を得ざれば道を行ふと能はずと思惟したり「税吏罪人の友と呼ばれて而して世を救ふの道」の孔子の夢もだも思ひ付かざりし所ならん然れども其教の中徳行の模範千古の卓説と見做すべきもの固より多し例へば己所不欲勿施於人と云へるが如きは實は萬古不朽の金言と謂ふべし此言を聞く者の其二千餘年前孔子の口より出でたる事を忘るべ

からず人或の之を泰西よ所謂ゆるゴルデンルール(金科)よ比較して孔子の言の消極的よ云ひたるなればゴルテンルール(凡べて人の爲られんと欲ふとの爾また人にも其如くせよ)の積極的なるよ如かずと云へども其説取るに足らず孔子の之を消極的よ云ひたれども其眞實の意の積極的よ云ひたると毫も異りたる事なし(レツグ氏亦之を容せり)若し猶は積極的よ云ひざるを以て不満足よ思ふ人あらば請ふ論語を開き見よ孔子が子貢よ語りたる語よ夫仁者已欲立而立人、已欲達而達人、能近取譬、可謂仁之方也、已とあるを見るべし是れ積極的よ云ひたるに非ずして何ぞや「欲立」と云ひ「欲達」と云へるの「已所欲」との意をバ例を以て云ひたるなり且つ能近取譬と云へるの積極消極双方の意に解し得

べし又中庸よ施諸己而不願、亦勿施於人、とある語よつぎて君子之道四、丘未能一焉、所求乎子以事父、未能也、所求乎臣以事君、未能也、所求乎弟以事兄、未能也、所求乎朋友先施之、未能也とあるを見ても孔子の言の強ち消極よのみ非ざるを知るべし。西洋の全科、東洋の玉條相符合する亦美ならずや。孔子の二千年間支那日本の道德の師なりき又其師として永く後世に記憶せられん、我等の支那よ孔子のありしを悦ぶべきなり我日本人の支那よ向て謝する所あるべしと云ふも敢て不適當にあらざるべし

孔子の政治論と道德説の既に略ぼ之を論したり次よ孔子の宗教を論すべし孔子の道にの宗教ある乎孔子は力めて鬼神の事の語らざりしが如し支那の古代に於て人の拜し

たる者も天神地祇人鬼の差別あり人死して其靈尙世も存するを鬼と云ふ、山嶽河海皆之を掌るの靈あり井を護り竈を護るの靈あり地上の靈を以て満ち而て其靈の善惡の差別あり此等山川を司とる神祇の外も支那の古代も於て天地造化の主宰なる一個の大能者を拜したるが如し詩書も天帝又の昊天など云へる是なり此等の鬼神に付きては孔子の思想の當時の常人の思想と同じからざりしを疑を容れず孔子曾て病みし時子路が上下の神祇も祈らんと請ひたるも有諸と言ひてを否みたり又論語も子路問事鬼神子曰未能事人焉事鬼敢問死曰未知生焉知死と見へ又樊遲問知子曰務民之義敬鬼神而遠之可謂知矣と見ゆされども又或處よの祭如在祭神如神在子曰吾不與祭如不祭と

も見ゆ若し焉能事鬼と斷言する位なら何の用ありてか祭る事在すが如くありし祭るの事ふるならずや儒者輩の色々も孔子を辨護すれども例へば伊藤東涯の辨疑録を見よ要するところ左に載する孔子家語もある語の外も出でざるべし家語云子貢問於孔子曰死者有知乎將無知乎子曰吾欲言死之有知將恐孝子順孫妨生以送死吾欲言死之無知將恐不孝之子棄其親而不葬賜不欲知死者有知與無知非今之急後自知之若し家語も云ふ所を信すべくも吾人の愈々孔子の意を解せざるなり非今之急後自知之とい亦巧みなる遁辭ならせや子貢の果して後も自ら之を知りたるか之を要するに孔子の鬼神の有無を斷言せず其如き事を語らんよりの寧ろ耳も觸れ目も見ゆる人間世界の事を語るべ

しと思惟したるにて其事業の目的の現世の外も出でず其講究の問題も亦此世の外も出でざりしなり左れば孔子の道よの宗教なしと云ひて可ならん孔子の總じて了解し難き事の力めて云ひざる様よなしたるが如し子貢の夫子言性與天道弗可得聞也已といへり孔子の人の性につきての論語に性相近習相遠也と云ひたるのみ何とも其善惡の判断をなさず左れども詩の大雅よの民之秉彝好是懿徳とありて性を善なるもの様よ云ひてあり孔子も之を惡なりと思ひしよの非ざるべし哲學の大問題ともなるべき事とし云へば孔子の其了知し難きを理由として之が討究を差し置きたり此頃支那哲學てふ一風の哲學ありと思惟して孔子をば支那の大哲學者と稱するものあれども此説如何

ぞや予の容易も同意を表し難し孔子が知り難きを理由として重大なる問題をばさし措きて之を論究せざりし人の太だ遺憾も思ふ所なり孔子の天と云ふ事をば數々言へり而してその何を指して言ひたる者なるか、儒者の皆聲を一よして孔子の所謂ゆる天の理なりと云ふ。詩書も見ゆる天帝と孔子の所謂ゆる天との固より同一の思想もあらざること明なり、支那の思想の孔子よ於て一轉して懷疑説に傾き爾後學者の自然以上の事よ關しての概ね懷疑論者となれりモリソンが支那より本國にある妻に送りたる書翰の中も支那の學者の皆無神論者なり而して普通の人民の如何、嗚呼唯理論者よ彼等の如何よ於て爾が所謂ゆる唯理なるもの、結果を見よと

云へりモリソンの言ひ支那後世の學者よとりての或の信
 ならん左れども孔子を目して近世所謂ゆる無神論者の一
 人に見做し得べき乎予思へらく非なりと孔子の所謂ゆる
 天の儒者輩の云ふ如くたゞ理とのみ解し去るべき者よあ
 らず孔子の宇宙間よ人のよく名づけ能はざる一の者ある
 を信じて之れを敬ひ尊みたるが如し孔子が君子有三畏、畏
 天命、畏大人、畏聖人之言と云へるの或人の云ひたる如く殆
 どトマス・カライルの語氣あり吾人の匡人が孔子を拘する
 と益々急よして弟子等いたく恐れし時子曰、天之將喪斯文
 也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何と
 あるを讀み又孔子が曾て弟子と禮を大樹の下よ習せしよ
 宋司馬桓魋之を殺さんと欲し其樹を倒しければ孔子そこ

を去らんとせし折弟子等一刻も早くといそぎけるに子曰、
 天生德於予、桓魋其如予何とあるを讀む毎よ彼のナザレの
 イエスが其時未だ至らざるの故を以て從容として衆敵の
 間に往來したりしを思ひ出でずばあらず吾人の之を讀む
 毎よ孔子の所謂ゆる天なる者の儒者の謂ふ所の理よあら
 ざるを知る孔子また曰く不怨天、不尤人、下學而上達、知我者
 其天乎と

吾人の論語に郷黨の篇あるを喜ぶ二千年前の人よして孔
 子の如く其容色言動のよく後世よ知られたる者恐らくの
 あらざる可し入公門、鞠躬如也、如不容、立不中門、行不履闕、過
 位色勃如也、足躩如也、其言似不定者、攝齊升堂、鞠躬如也、屏氣
 似不息者、出降一等、趨顏色、怡々如也、沒階趨翼如也、復其位、蹶

踏如也、と讀み升車、必正立執綬、車中不内顧、不疾言、不親指、と讀み又席不正不坐、割不正不食、沽酒市脯不食と讀む毎々其行狀の一風あるに驚かずバあらず今日よりして之を見れば孔子の一個の奇人なり。西洋の學者中孔子を評して其餘り又行儀作法は拘泥したりしハ蓋世の偉人たるハ不似合なりと云へる人あり行儀法の一端は於てハ今人中孔子は傲いんと思ふ者なかるべし禮儀三百威儀三千の教訓をば實行せんと企つる者なかるべし左れども吾人の知る孔子の品格は於てハ百世の模範とあして可なる者あるを、固より吾人の有若子貢の徒と共に自生民以來、未有盛於孔子也と讚嘆し仲尼日月也、無得而諭焉、と尊稱する者ハあらず固より孔子の品行ハ取る能ハざる所あるを知る左れども

徳之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也と云へるを讀みてハ誰か其修業積徳の念の厚きは感動せざらんや甚矣吾衰也久矣、吾不復夢見周公と云へるを讀みてハ誰か其古聖賢を慕ふ心の深きは感激せざらんや孔子曰七十而從心所欲不踰矩と嗚呼孔子の修練の久しき遂はこゝに達したるか吾人の論語を繙て此語を讀む毎々思はず坐を端しくして孔子が積徳の至は驚かばあらず吾人の古の名賢君子が吾願ふ所の善ハ之を行ハば反りて願ハざる所の惡ハ之を行ヘりと嘆息したるを知る左れども其言の孔子に及べる者あるを知らず嗚呼知るたゞ一つ猶ほ大なる聲のあるを曰く爾曹のうち誰か我を罪ハ定むる者ある乎と孔子世はありて三千の弟子を率ひ、死して支那の後世を支

配せり其感化力の由る所主として其品格あり其弟子を
 教るの道其弟子と接するの情吾人をして轉た感嘆敬慕の
 念を起さしむ孔子其狀陽虎と似たるを以て匡人に拘られ
 し時顔淵後れて來りしかバ子曰吾以汝爲死矣顔淵曰子在
 回何敢死とあるを讀み又史記は孔子の死に近ける折の事
 を記して孔子病子貢請見孔子方負杖逍遙門曰賜汝來何其
 晚也孔子因歎歌曰太山壞乎梁柱摧乎哲人萎乎因以涕下
 子貢曰天下無道久矣莫能宗予とあるを讀む毎に吾人の敬
 愛悲嘆の情を發せずばあらず吾人の孔子が一世の大人た
 るを敬し其温良なるを愛し其時勢と合はざるを悲嘆す當
 時の賢者として道の行いれず時の如何とも爲すべからざ
 るを悟り高蹈勇退して世俗の外は逍遙する者少からざり

しに孔子の獨り諸邦と往來し長沮桀溺の徒か其勞苦の無
 益なるを諷するも逢へば鳥獸可不與同群天下有道丘不與
 易也と言ひて天下の民をば棄つるも忍びざるの衷情を見
 んせり健康なる者の醫師の扶を求めずたい病ある者之を
 求む孔子が多年の勞苦も亦た之れが爲なるか孔子世と在
 りて四方に流浪して喪家の狗と呼ばる今の億民の上と
 君臨する清帝も年毎に其の廟と詣て其の像前と跪くとす
 ん

◎日本の青年と英語

和田垣謙三

諸君、余は英語の本邦青年の爲め極めて必要なることを確信する者なり。故に英語を教ゆる者又英語を學ぶ者は余に於て同志同感の友人視する所なり。故を以て余は時々當文學會に臨席することを承諾す。今日初めて當會に列することとなり。余は多分初めて諸君の多數と相見ることならんが、前も述べたる如く英語の友に即ち同志同感の友と余に信するが故に、願くは余をして遠慮なく服藏なく余が鄙見を開陳せしめよ、而して若し余の鄙見よして誤れる所あらんか、幸に諸君の友義的討議討論を拜聽し以て吾人の共同目的即ち英語研究傳播の奏功を期圖せん。

余の曾て經濟學と教育學とを比較し一種の教育哲學を主張せしことあるが、其中に貨幣と言語とを對照して云へる

とあり曰く、貨幣は經濟的有形的言語にして言語は教育的無形的貨幣なり」と蓋しその意に貨幣ありて貨物を交換し得る如く言語ありて思想を交換し得べし、貨幣の貨財融通上必要不可欠如く言語の智徳開發上必要不可欠を云ふなり。若し此説よして果して誤なからんか、余に諸君よ向て、右の一事即ち言語は貨幣の如く貴しとの一言の外、言語の必要よ付ては他は片言隻語を費やすことを要せざるなり。又右論中各國言語を異にするの不便を述べ之を各國貨幣制度の不同なるに比し、且つ言へるあり曰く、故に經濟學者は萬國普通貨幣の説を唱ふ、萬國普通言語の説亦止むを得ざるなり」と。余は諸君よ向て、右の一事即ち國際間言語の不同は恰も貨幣の不同の如しとの一言の外、吾人が外國語を

學ばざるべからざる不便も付ての他も片言隻語をも要せざるなり。然り言語の無形的貨幣なり而して今日の勢吾人の一國の貨幣のみにては世も處し身を立つること太だ困難なり。故も吾人の本邦も於て無形的外國貨幣の造幣所を要するなり。獨國英國佛國伊國支那朝鮮グ्रीク、ラテン、ヒブリウ、サンスクト等の諸貨幣を要するなり。就中尤も通用好きの英語貨幣ニツアル。磅の「フラン」マルタ等も比して優劣奈何は予之を知らず。兎も角歐洲大陸も支那印度地方もても旅人商人が尤も便とするの英貨なり。英語の便亦英貨の便なるが如し。それ然り故も人間萬事金の世の中の一語もして大過なからんか。人間萬事英語の世の中と云ふも敢て過言も非ざるべし。諸君よ、諸君の一日も早く英語

と云ふ一種の貨幣も富むの算段を爲さるべからず。貧すれば鈍すとかや。英語も貧き者豈亦鈍するの患なしと云ふべけんや。言語の必要、外國語の必要、殊も英語の必要も付きて予の不充分ながら時間の許るす限り予が意見を陳べたりと信ず。請ふ一步を進めて外國語を學ぶの方法も論及せん。

凡そ何事も關はらず學ぶと云ふこと、太だ面白きこととの相違なれども、亦随分困難なるとよの相違なきなり。獅子のその子を教ゆるも當り之を千仞の巖下も驟り落とすとかや。幽谷鶯兒の吟詠を學ぶ亦一朝一夕の事も非ず。扱萬物の靈長たる人類に取ても學ぶと云ふは決して容易の事に非ず。小兒が自國語を學ぶの困難なるの御互も覺への有

るとなり。少く長じて吾人が遭遇する手習讀書の困難の小
 兒の淺はかなる心中より父母と師とが共謀して己を苦む
 るなるかと思ふ程なり。今翻へりて吾人が外國語を學ぶの
 困難を察するに、おれに亦一種特別の苦みあり。その幼時
 の如く父母や師を恨む如きとは之無く却て己を恨むと
 是なり。その何故かと云ふは、成る程自分が新たく學ばんと
 する外國語に取りての自身の幼兒なり、いろはのいの字も
 知らざる呱たる背上の赤兒は異ならざるなり。然れども
 他の點は於て己は業は成長し居るなり。つまり修學の一
 具は過ぎざる外國語を學ぶ爲めは少らざる金や時や腦力
 を費消するの奈何も腹の立つことなり。此かるべかげた
 事に如矢光陰を送るの *to a-ba ka-a-ka = haka* なりとい時々

「スベルリング」を學ぶ青年の口頭は發する所の泣言あり。然
 れども此所か悟り方の肝心なる所なり。所謂大人不失赤子
 之心とはこれぞと心の紐を固たく結ぶべき所なり。所が茲
 は外國語研窮の困難をして愈々重大ならしむる一事と申
 す。青年の多數が右の如き心掛けを爲し能はざることは是
 なり。赤子の如き純一謙遜なる精神を保ち能はざること。是
 なり。余の本邦官私學校の生徒が暗雲は六ヶ敷外國書を讀
 むことを熱望するの事實あるを認む。余は此事實を徴して方
 今の青年が赤子の如き單白無偽なる精神を欠とは云ふな
 り。曰くマコウレー曰くミル曰くエマソン曰くカーライル
 曰くシエクスピヤ曰くミルトン此等の諸大家は本邦青年
 の好で誦する所なり。奈何にも右等諸大家の何れも能文家

なるよの相違なし。然れども所謂能書なるもの往々讀み難
 き如く、能文亦甚だ解し易からず。右等能文家の物したるも
 のの英米人と雖も往々解し能ざる所なり。併し諸君の充分
 に解し得らるるものと見へ之を面白しと言ひ玉へり。小生
 杯よの未だなか／＼の眞味の分らざるなり。蓋し惟ふに
 大家の文章の例へば金貨幣又の銀行券の如き大金なり。な
 か／＼貧乏人の手よ入るものよあらず。萬一手よ入るもの
 か／＼自在よ使ひ切れるものよ非ず。貧乏人や小兒の手に
 の銅錢や白銅錢が適する如く、外國語に取りての貧者ども
 幼者ども云ふべき我々よは高價なる大家の名文傑作より
 の寧ろ價值も安く従て又解し易き平凡文章こそ可けれ。
 例を變へて之を謂ひ、胃弱の人よの余り油こき即ち英語

よ所謂 High なる物よりの寧ろ淡泊よして消化し易き物の
 適する如く、外國語を玩味消化する力少なき我々胃弱者よ
 は山海の珍味よりの寧ろ通常有り觸れたる人參午房こそ
 適當なり。身体骨格充分よ發達し四支百官各々其働きを完
 ふするよ至りての、何を食するとも食傷の恐りなかるべし。
 予を以て之を見るよ、今日の青年の不消化の外國語を嘗め
 散らす爲め多くの食傷を病める者なり。言ふ迄も無きこと
 なから、衛生の文明人の注意すべき所又注意する所なり。而
 して衛生に身体的精神的の二種あり。扱青年諸君が賄方を
 攻むるや極めて酷なり。然れども此れ前途將來に大望を抱
 ける有爲者がその身を重んずるより即ち衛生上の觀念よ
 り出るおとすれば深く咎むべからず。予は望む青年諸君

が賄方征伐の意氣込を以て諸君の精神的賄方なる學校教員も當られんとを。然るも茲も尤も不思議なるは、諸君が諸君の爲めは不消化物を供する精神的賄方を攻めずして、却て消化物と供する諸教師を攻むると是なり。文章を解するに決して容易の事に非ず。自國の文よても然り、況や外語國よ於てをや。然るを諸君が世の身体的胃病者の如く暗雲よ不消化的文章を貪ばらるゝは病氣の結果とは云へ此れ余が諸君の爲に決して取らざる所なり。言ふ迄も無きおとなから、文章の文字より成立すと雖ども彼ど是とは同一物よの非ず。假令は文字を解するとも文章を解せざるにあり。所謂語氣語勢と云ふものの字引讀よて到底會得すべからざるなり。予の會て或る學校よ於て入學試験を施したると

ありしが、獨乙語の *Cultur* 即ち文明が高度に持來たされし即ち文明が長足の進歩を爲したると云ふを耕作が高度に運ばれし即ち農民勤勉よして山腹山巔迄も耕すよ至りしなりとの解釋を聽き絶倒せんとしたるとあり。又 *Einfluss* 即ち英語の *influence* 即ち形響が佛國より獨國よ及べりと云ふ文章の流れが注入すと譯せし者ありしが、何の流れかと尋ねしよ、*ライン*と云ふ河が佛國より獨國よ注入とるなりとの答辨を得たるとあり。又英語の *trunk* 即ち行李を提げ云々と云へるを木幹を切り倒して之を持參せり云々と譯せし者ありたり。發音等よ至ては *tomh* を「トンプ」と讀む者あり、*buy* を「ブリ」と讀む者あり、又先刻英文を朗讀されし御方は *drought* を「ドロート」と讀まれたり。彼人の多分そらドロート

推量読みよやられたるなり。此の如き類は予が今日の職掌上親く之よ接する場合少きが故よ、予の之を知ると多からずと雖ども、若し外國語教員よ就て之を求めなば蓋し枚舉よ暇あらざるべし。此れ皆胃病者の病床浮の言と知るべし。復た次よ胃病者の通じよろしからせ抑々出と入との何事よ關わらず平均を要す。外國貿易よ於ても歳出入に於ても呼吸よ於ても食物に於ても皆然りとす。本邦の青年外國語を學ぶ者讀書力の弱さと前陳の如し。而て談話作文の力よ至ての讀書力より更よ一層弱きを見る。夫れ讀書の入りたり談話作文の出なり。此れ不消化物を多く食ふて却て通じ悪きよ非ずや。外國語の通じの悪きハ此れ即ち外國語よ通せざるなり。此れ皆胃病の結果と知るべし。苟も能く謙遜の

心を維持し己を見ること赤子の如く又胃病者の如く、己の分よ應トて入るべきものを入れなば出るべきもの亦從て出づべきなり。即ち出入權衡を得、讀書談話作文の諸力并行并進すべし。英語よて語り又の書する時の必ずマコウレ！、ミル、シエクスピア、ミルトンの如く語り又書せざるべからずと思ふ故、口を開くも筆を執るも誠よ容易の業よ非ず。小兒にして堂々たる演説を爲し胃病者にして壯健者の眞似を爲さんとする故、到底何事も出來ざるなり。小兒は小兒の眼力耳力に適するものを見聞せよ、その見聞したることハ小兒の口相應に談せるなり又小兒の手相應よ書けるなり。胃弱者ハ胃弱者の積りにて飲食すべし、左すれば病人相應の通じはあるべし。

諸君中或ハ余が前陳の意見を諸君ニ向て痛論するを見て怪む者あらん。學校長又ハ教頭教員等に説かずして諸君に向て吐露する所あるを咎むる者あらん。然れども此れ大に理あり。何となれば余の聞く所ニ依れば、方今府下多數の學校ニハ輿論政治とか云へるもの専ら行ゆる、由にて、而してその所謂輿論なるものは多くの未丁年者の、外國語に付ては小兒とも云ふべき者の、余が前ニ云へる貧弱者胃弱者の輿論なり。校長教員ハ右謂ふ輿論の壓制に苦めるなり。余が故らに諸君に向て縷々論争するもの敵は本能寺に在るを知ればなり。

然れども一方より之を考ふれば、今日の青年ニ前陳の病あるハ大に恕すべきものあり。何となればその病源たる遠く本邦維新前の教育制度に由來するものあればなり。四書五經の素讀是なり。黃口の白面書生妄りニ治國平天下を論ずるの習ハ遂ニ性と爲れるなり。維新後學問の方法大ニ改まり小中大學の教育著ク改良の途に就きしと雖ども、積年の余弊ハ一朝一夕の洗除し能ふ所ニ非ず。今日の外國語研究者ニ於て尙は此の余弊を見る。

蓋し本邦人の短所ハその短氣なるニ在り。維新以來今日ニ至る迄短氣の爲めニ失敗せしと一々列擧すべし。噫乎短氣ハ損氣。俗諺吾を欺かざるなり。況や青年諸君の前途ハ遠なり。前途將來青年諸君の「ポケット、マナー」となり。青年諸君が學理的實務的の種々様々なる買物仕入物を爲すニ必要不可欠ものは外國語なり。特ニ英語なり。英語的貨幣な

り而して増資の道他なし、メチー、エリツトル、メークス、エ、ミツクルの主義に外あらず、見よ世の暴富を計る者却て挫折破産すること多し。諸君宜く鑑むべし。

今日の青年外國語の力大だ乏きを見、力乏きが故に修學上の不利不便少からざるを見、余は一方に於ては諸君を胃弱者と鑑定し、遠慮なく服藏なく醫士を氣取りて診断書と處方書とを諸君の面前に提せり。又一方に於ては諸君を貧弱者と鑑定し、遠慮なく服藏なく經濟家を氣取りて一の經濟策を呈したり。若し余が鑑定よして誤らんか、予が謂ふ如き處方及び經濟策の不必要ならんか、予の空く一時間を浪費したるなり。然れども若し諸君にして果して健全且つ富裕ならんか、余の敢て一時間の浪費を惜まざるなり。予は諸君

と共に諸君の健康と諸君の豊富とを祝し、且諸君の愈々健康益々豊富ならんことを祈るのみ。謹で諸君の静聽を謝し、且熱心の餘り用語或は過激に失したるを謝す。

基督教主義の教育を論ず

市原盛宏

「我が來るの義人を召く爲に非を罪ある人を召て悔改させんが爲なり」とい、是れ我主イエスが其の降世の本旨を示し給へるの語にあらすや。彼れ又曾て其の門徒に告げて曰く、「爾曹の地の鹽なり世の光なり」と此の他基督が其信徒に教へ給ひし日常の祈禱文に於て、願くは爾國を臨ませ給へ、聖旨の天に成る如く、地にも成せ給へ」とあるが如き、又其の將

さよ世を去らんとするの前よ當り、弟子等の爲よ祈りて、我れ爾よ彼等を世より取り給へと祈らば、惟彼等を守りて惡よ陥らす勿れと、求め給ひしが如き、是れ皆基督教が漫りに現世を厭ひ未來の幸福をのみ渴望するの宗教よあらざるを示すよ足る、それ人生の僅か五十年のみ七千古來稀なりとす、人の此の朝露の如き生涯を終れば、其れよ全く消滅すべきものなりや、是れ決して人心の是認する能はざる所よし、て、基督教の固より靈魂の不滅を教へ、來世の福祉を説く、然れども之れを求めんが爲に速かよ此の世を去るべしとい教へざるなり、思ふよ其の本旨とする所の、人若し死後の福祉を望まば、須らく先づ生前の義務を全ふすべし、基督を信じ舊惡を悔改して、翻然再生の人となりて、正義の軍隊よ入り

真理の士卒となり以て人間の罪惡を驅逐し、社會の虚偽を排除し、此の世を一洗して神の王國となし、其の聖旨の天よ成る如く、地よも成さんとを熱望すべし、苟も此の途よ依らずんば、天國の光榮を望むべからずと云ふよあるなり、抑よ此の如き教理にして、一たび人心よ貫徹し、社會よ浸潤するや、小の一身一家の細事より、大の天下の政治、法律、文學、技藝、其の他農商等の業よ至るまで、人間萬事一として其の影響を受けざるのなかるべし、試よ歐洲十九世紀間の歴史を見よ、初め基督教が羅馬帝國の一隅よ起りしより、爾來幾多の世變に遭遇せしも、之れを経過することよ、愈々進歩し、益々深く人心よ浸潤して、其の制度文物の上よ、著しき感化を與へし様、恰も旭日の輝々として東天よ昇り、地上の萬物を發

育するも異らず、之れを要するも、基督の實も歐米文明の一
 大要素なり、彼の世を厭ひ俗を避けて、徒ら讀經祈禱をのみ
 之を事とする所の世外教と同一視するの尤も非なり。
 歐米文明の風潮の洋々乎として四海を漲り、數百年間東洋
 の一隅も孤立せる、我日本帝國も、遂に其の浸入を防ぐと能
 はずして、一たび國を開きしより、泰西の制度文物は、日よ月
 に輸入し來り、之れも伴ふて其骨髓精神とも評すべき、基督
 も亦入來れり、若し此の教もして漸く我國も蔓延し、以て人
 心を感化するに至らば、余輩の確信す、早晚我國に於ても前
 述の如き現象を呈せんことを、人或は我國現時の基督教徒を
 責るも、其の政治思想も乏しきを以てし、又殖産興業の事も
 迂きを以てすれども、是れ、職として彼等が未だ幼稚なるも

由るものなり、それ事物の發育進歩するや、自から其の順序
 あるものにして、初は苗次も穂いで中も熟したる穀を結
 ぶとは、實も千古の通則あり、思ふに我國現今の基督教は方
 々播種の最中にして、其の教師輩が孜々として日よ、夜も
 勤勞する所を視るも、又其の信徒等が業務の餘暇を以て、熱
 心盡力する所を察するも、皆是れ十の八九の布教の一事も
 歸するが如し。さへ去りながら基督教徒の事業豈も獨り布教
 も限らん、幾萬の信者豈も悉く傳教師たるを得ん、余輩は既
 り已に、基督教が我國百般の事業も參與して、漸く將さる其の
 本色を見いさんとするの徵候あるを認む、就中此も基督教
 徒の事業もして近頃世人の注目する所となり、余輩信徒た
 るものが今後益々盡力すべきの一事あるを信ず、是れ即ち

我國民の教育なり。

思ふは基督教主義の教育と云へば、心中忽ち猜疑の念を發し、是れ必ず陽の教育を説くも、陰かよ之れを以て布教の機關となすものあらんと云ふ人もあらんが是れ決して余輩の本旨をあらざるなり、苟も斯る策略を用ひるの人あらば、余輩の信ず、之れ實に教育の爲に不利なるのみならず、遂に亦布教の爲にも有害ならんとを、其れ然り然れども余輩の又確信す、基督の實は吾人が人類教育の本旨を全ふし、其の目的を達せんとするに當りて、最も必要のものたるを、論者或の難じて曰はん、凡そ宗教と教育との大に其の趣を異にするをあらざるや、苟も教育家たるもの、決して之れを混同すべからざと、固より然り余輩不肖なりと雖も亦之

れを知らざるをあらす、然れども人若し此の理を誤りて宗教と教育との間に全く相互の關係なしと云ふに至りては、余輩大に其の非なるを知る、蓋國民の宗教は、大に其の教育上は影響するものにして、其の證跡は古今の史乘に昭然たり、試み彼のブラマン教が印度人民の教育に於ける、ゾロアストル教がペルシヤ人民の教育に於けるの影響を見よ、其の他エチプト及びユダヤの如きは云ふも更なり、近くに神佛二教の我國の教育に於ける、又基督教の歐米諸國の教育に於ける、其の關係の重大なる、火と觀るよりも明かなり、加之余輩熟ら此の關係を察するに、是れ決して偶然の者にあらざるなり、何となれば凡そ宗教なる者の何れも多少教育の趣意を胚胎せざるなく、古代の教育は各國とも其の

祭司僧侶の專掌せる所にして、漸く人智の開發し、分業の法行ひるゝに従ひ、遂に分娩して、現今の教育事業となれる。あらずや、論じて此に至れば、余輩の宗教を以て教育の母となし、教育の即ち其の子孫なりと斷言するも、敢て誣言あるらざるを信ず、以上は唯宗教教育相互の關係につき、一般に概論したるのみにして、各宗教の性質よりて、其の影響の利害得失についても、更に論究すべきと多かるべれども、獨り基督教と教育とに至りては、其の關係極めて重要にして、且つ其の利益の洪大あるを、余輩の信して疑はざる所なり、請ふ試よ之れを略陳せん。

第一、基督教の人の品位の貴重なることを明示す、思ふに教育家の常々注目すべきもの三つあり、一は曰く學生、二に曰く教師、三に曰く教授の材料、而して此の三者中最も大切なるものは、學生として、教育家の其の品位の貴重なるを知り、且つ之れを感ずるの割合を以て、愈々之れを愛し、之れを教へ、之れを導くは自然の勢なり、抑人を萬物の靈長と稱ふるは、古へより之れあり、然れども其の深遠高尚なる意味を熟知し、且つ之れを感動するの程度は如何、余輩は古今萬國の歴史を徴して、基督教の範圍外に於ては、其の甚だ近淺微弱なりしを信するなり、それ基督教の人を靈性あることを教ゆ、而して此の靈性なる者は、元と彼の全能、全智、至義、至愛、天地を創造し、萬物を主宰し給ふの神に像りて造られしものにして、人生五十年の一夢を終はればとて、風前の燈の如く、忽ちにして消滅する所のものゝあらざり、現世の譬へば小學校のごと

く、更に進んで中學に入り、又大學入り尙進んで社會の實學を就くも等しく死後尙永遠無窮の生命あることを證明す。故に又其の貴重なるとは、全世界も勝れりとする、且つ又基督教の範圍外に於ては、古來人類中も嚴格なる等級を設け、人性の品位の生れながらにして高下ありとせしむ、基督教の教ゆる所の大に異なり、上の王侯貴族より下庶人に至るまで、等しく是れ神子にして、四海皆兄弟姉妹なり、人為の階級を以て、其の發育生長を妨害するの大に非なりとす、次に又基督教の範圍外に於ては、自主自由の民たりと雖も全く國家も財産視せられ、子女の其父母たるものも所有品も等しく、其の生殺與奪の權に至るまで、擧げて之れを國家と父母とに一任するの惡習なりしが、基督教に於ては、大に異なり、善く人

類個々の價值を認め、其の國家に對する關係を明し、又人の父母たる者をして、其の子女を得たるの天與の賜なり、之れを撫育するの神命の職務なりと信せしめたり、それ玉工の日は夜も拮据匪勉し、精神を凝して琢磨するの、其の玉の貴重なるを知らばなり、植木屋の水を灌ぎ肥料を與へ、草を除き枯枝を去り夜以て日は繼ぎ、片時も忘るゝとなさむ、其の樹木の貴重なるを知らばなり、然るを況んや人類に於ておや、今古有名なる教育家が、其の偉功を奏し芳名を天下後世に遺すに至し、も職として是れ其の學生の貴重なるを眞知せしむ由るなり、嗚呼基督教國に於て教育の盛なる普通教育の盛なる又偶然もあらざるなり。

第二。基督教の最も善良なる教師を養成するの力あり、凡

を教師たるものゝ必要なる資格と云へば、高尚なる品格なり、深遠なる學識なり、又授業上の熟練なり之を細説すれば其數實も多かる可しと雖も、之れを要するも其最も肝要なるもの誠實と仁愛とを歸せざるを得ず、何となれば愛の百徳の本なれば、若し誠實にして此心あるとき其品格の完備すべきの勿論として、假令其の學識技藝も於ての當初少しく欠くる所あるも毎之れを修め得ると易ければなり。

然らば今教師たるもの、身も於て如何せばよく其學生も對して誠實仁愛の心を發動せしめんやと云ふに、先づ彼れをして其の學生たるもの、品位を眞知せしむるもあるべし、基督教の既も余輩が前段も於て開陳したる如く、此の點も

ついでに最も貴重なる知識を彼れも與へたり、若し其の學生の斯の如くも高貴なるを知らば、必ずや其の責任の重大なるを覺らん、其責任の重大なるを覺るもの誰れか誠實ならざるを得ん、又其の學生等の前途を想ひ王侯將相も此の中より起らん、學者も文人も豪商豪農も亦此の中より出でんと希望する時の彼の植木屋の樹木も於けるが如く、又玉工の寶石も於けるが如く、其の學生を博愛し、其職務を樂しむの念自から湧出せん、次も又基督教の彼れも示すも、最も完全なる教師の模範を以てせり、是れ即ち基督教の開祖ナザレのイエスなりとす、イエスが宗教道德の部門も於て最も高尚にして深遠なる教を遺し、且つ其の教ふるや、徒も口頭のみを以てせず、必也之れを躬行し以て實例を示せるが如き、

今更喋々辨するも及ぶまじ、然り其の博愛至誠の美德に至てい、余輩が特々讀者諸君の注意を促さんと欲する所なり、思ふも彼れ人性の本來甚だ高尚貴重なるを熟知し、且つ我が人類が此高貴なる本性に恃りて虚偽に陥り、罪惡を沈み、遂も其の固有の美妙と光榮とを發する能はざるのみならず、却つて無窮の禍を沈淪せんとを憂へ、博愛至誠の情之を禁する能はず、斷然至尊の位を去り、無上の光榮を捨て、下土を降臨し、健かなる者は醫士を求めず、我が來るの罪ある人を召きて悔改めせんが爲なりと唱へ、稅吏罪人等の友となり、自ら貧賤を居て人を富貴ならしめ、寢食をも忘れて弟子等を教導し、真理の爲めには艱難をも厭はず、人類の爲めにい辛苦をも甘んじ、遂も其の身命をも擲て之れが犠牲

となし彼の十字架上よ於て肉を割き血を流すに至る嗚呼是れ何等の至誠ぞや、宜なり、其の淋漓たる寶血は、實に博愛至誠の泉源となり、爾來混々として愈々湧出し、天下萬世其の流れを汲んで誠實仁愛の心を發動するもの、擧げて數ふる暇あらず、或ハハワルドの監獄改良となり、或ハロミッリの刑法改正となり、又ウカルバフォース等の奴隸廢止となり、フロレンス、ナイチンゲールの看病事業となり、其他貧院、孤獨院、盲啞院等も從事せる人々に至る迄、各其執る所の業は、異なりと雖も、能く其の精神を發動、培養せる所以のもの、皆等しく此の泉源を歸せざるを得ざるなり、豈も啻此等の人のみならんや、余輩は熟々彼の教育社會の泰山北斗たるベスタロツシー、フルベルの如きを始とし、其他トマス、ア

ルノルド、メーリー、ライオンの如き、凡そ高名なる男女の教育家を觀察するは、是れ亦概ね其の至誠を此泉源に受け、以て其の偉功を奏したるの人々なるを發見するなり。

第三、元來基督教の宗教道德の事を以て本領とし、其他の學科に至りては、敢て之を教授せんとするものゝあらざれども、凡そ其信徒をして、光を求め眞理を重んぜしむるの著しきは、試み其の經書を繙きて光と云ひ眞理と云ひ、其他之れは類するの語を用ゆるの甚だ多きを見るも明かなり、それ光を好み眞理を愛するの學問の端緒なり、基督教の決して或る論者輩の思へる如く、學問の敵とあらずして却て之れが良友たり。偕其の直接教育上と與ふる所の材料を見るは、一に即ち宗教上の眞理なり、抑教授の材料と云へば、天文學も

あり、地質學もあり、生理あり、心理あり、其他動物、植物、地理、歴史等の諸學科より書畫、作文、演說等の技藝に至るまで、其の種類極めて多し、然るに吾人假令此等の學藝を教へ盡したりども、若し吾人をして斯る心意を有せしめ之れを授くるは、此の身體を以てし、仰いで天を窺へば讀むべきの天文を備へ、俯して地を察すれば學ぶべき地質を置き、其他百般の思想を萬物に含め、之れを貫通するは原理法則を以てし、吾人の生長發育上と於て、何一つとして缺如たらしむることなき天地の大原因、宇宙の大心意として所謂皇天上帝、慈愛の天父あることを教へずんば、余輩は信ず、其の欠點の重大なまて、譬へば家屋を建築するもの其の上棟を爲さざるが如くならんを加之、吾人の又開發教育の本旨に従ひ、凡そ學生

の資性に於て、自然に潜伏する所の諸能力を開發し、體力、智力を始とし、忠信、孝悌、愛國の情に至るまで、諸種各態の徳性を發育するとも、若し其の神明に對する宗教心を開發せざるときは、恰も國王の正服端坐して冠冕を戴かざるが如く、未だ決して完全なる教育と云ふ可からず、未だ決して人性の美妙を盡し、其の幸福を全ふせしむると能はざるべし、蓋し宗教の人性の自然に發す、到底人為の手段を以て之れを撲滅し得べきものあらざるなり、之れを誘導するも其の道を得ずんば、必ず大なる禍を生せん。

次に即ち徳育上の材料なり、抑徳の事たる、其の教育上は於て最要の地位を占むべきは、中外既に議論の一定せる所なれども、其の方法に至りては、現に我國教育社會の一大疑問

よして甲論すれば乙駁し、議論百出、未だ何れに歸着すべしとも思はれず、請ふ少しく余輩の卑見を開陳せん、それ古今の嘉言善行を示すも良法ならん、兵式體操を課するも或は可ならん、善惡の利害得失を説教するも亦可ならん、教師自ら善徳を行ひ、以て學生の模範となるも大に可ならん、然れども是れ皆徳育の枝葉のみ、若し其の根本を培養するにあらずんば、焉んぞ能く實功を奏せん、何をか徳育の根本と云ふ、是れ即ち道德の基本を明かにし、學生をして之れを確信せしむるにあり、蓋し真正の道德なるものは、内に善を樂み徳を貴ぶの心ありて、而して後ち外に見ゆるものにして、外より之れを附着すべきものよあらざるなり、苟も此の心よして存せざるときは、假令如何なる嘉言を吐き、又如何な

る善行を行ふも、是れ唯外形の虚飾のみ、然るを況んや此の虚飾の道德すら、一たび之れが境遇を異にし、内人欲の激動を遭ひ、外人事の激變を遇へば、忽ちよして壊崩する。よ於ておや、それ基督教の固より嘉言善行を乏しからず、上の聖經も載せたる金玉の言行を始とし、下十有九世紀間の史上よ於て、其の聖徒等が遺したる言行中には、以て百世の法となし、以て千古の鑑となすべきもの少なからざるべし、然れども余輩を以て之れを見れば、其の徳育上よ於て最も有功なる所以のもの、蓋道德の爲め、磐石の基本を與へ、徳性を養ふ、無窮の活泉を以てすべし、然れども、思ふに人智の開發するに從ひ、人の益々事物の理由を探究するの傾きを生じ、道德上の事に於ても、到底唯權威のみを以て誘導するは極めて

難く、師父の意見も、君主の命令も、孔孟の教も、ソクラテスの言も、若し適當なる理由なきときは、遂に其の威を失ふに到らん、此の時に當りて、獨り磐石の基礎となり、以て道德の大厦高樓を維持し、雨ふり大水出で風ふきて之を撞てども倒るゝとなからしむるもの、それ唯基督教の本原真理にして、即ち神明の存在、人魂の不滅、善惡の應報等にありと云ふべし、其れ然り基督教の既よ此等の原理を以て、人心の理性を満足せしむ、然れども、入智固より限りあり、若し道德の本源よ溯らんとし、或は善惡の結局を究めんとするときは、雲霧濛々到底之れを知了するの望なからん、此よ於てか吾人の又自ら信憑すべき人の教を求め、權勢ある者導のを乞ひ、以て世を渡るの羅針盤とし、暗夜を照すの燈明とせんことを欲す

るものなきなり、然るも基督教の彼の信憑すべき歴代の預言等と、凡べての人を照す眞の光にして、天地の廢ん然と我言の廢じと斷言せるイエスとより、最も權勢ある教を授け、以て此の望をも満足せしめたり、その去りながら、本來道德の人の情性は根底するものにして、之れを養成するも情あり、之れを妨害するも亦情あり、故に一たび人欲の發動し、惡念邪情人心を擾亂するも當りて、最も權勢ある教訓だも、其の力を失ひもの、如し、然るを況んや冷淡無味の道徳れや、到底以て頼とするも足らざるなり、是も於てか基督教の亦此の欠乏をも補ひ、以て意性を満足せしめたり、是れぞ即ち余輩が先きも、徳性を養ふも、無窮の活泉を與へたりと評せし所以にして、所謂活泉とは、神の慈愛と未來の希望と

なり、それ神の愛にして、其の慈みの天地も明かなり、然るも人の其の洪恩を蔑し其の聖旨に背き、自ら罪惡も陥り、禍を招き、却つて彼れを怨むる状あり、而かも其の慈愛の洪大至誠なる却つて之を憐愍し且つ之れを罪禍の中より救はんが爲め、其の獨生の子を下し賜ふも至る、而して其獨生の子なるイエス、キリストが天父の聖旨を奉戴して、博愛至誠遂も十字架の上も死し給へるも至りて、其の仁愛實も萬古も比類なく、其の能く人心を感化するも亦宜なりと謂つべし、人心一たび此愛も感ずるときは自から神を敬しキリストを愛し、惡を惡み、善を好み、天意を行ふを以て無上の快樂と思ふも到る、之れも加ふるも來世の希望あり、余輩が之れを評して、徳性を養ふ無窮の活泉ありと云ふは非なる乎、尙一

事の論すべきものあり、是れ即ち聖靈の感化なり、思ふに聖靈の感化なるもの、基督教實驗上の事として、譬へば聲音の響者よ於けるか如く、彩色の盲者に於けるが如く、言語を以て説明するの難しと雖も、基督教主義德育の實施よ於て、其最も必要なる古今の實驗に照して明白なり、聖經よ曰く、人の水と靈とよ由て生ざれば、神の國よ入ると能ざるや、肉よ由て生るゝ者の肉なり、靈に由て生るゝ者は靈なりと蓋余輩は確信す、世よ道德の行いれざるや智識の足らざるが爲よあらずして、人心の腐敗し徳性枯死せるが爲めなるのみ、論じて此よ至れば人或の問ふて曰はん、然らば即ち我國現時の教育に於て基督教主義の德育を實施する方法の如何、余輩の既よ基督教主義の德育を以て、最良のものなりと信す

る上の、凡そ全國の諸學校をして、悉く之れを採用せしめたるの勿論の希望なれども、未だ國民の大多數が基督教を信奉せざるの今日よ當り、特よ一般人民の租税を以て設置する所の官公立諸學校よ於て、到底行いるべきとよあらず、亦行ふべきとよあらずと信せ、況んや近頃有名なる一種の論者輩が、宗教は畢竟愚民を教化するの機關たるよ過ぎずとし、傲然之れを輕蔑しながら、尙且つ之れを天下の諸學校に採用せしめんと欲するよ至りて、余輩大よ其の非なるを信す、何となれば是れ唯我國民を愚弄するのみ、德育上よ於て、毫末の効力もなかるべければなり、果して然らば基督教主義の德育を如何せん、之れを實行すべきの地の何處よある曰く、下、幼稚園小學校を始めとし、上、大學よ至る迄、各

種の私立學校を盛よして、爰も其實益を試むべし、蓋私立の學校の、元來同主義同感の人々相集り、互も同心協力して設置する所のものなれば、一たび其校主及職員等が、之れを採用せんと欲するに於ては、其の實施の極めて容易なるべく、其の功績も亦必ず著しかんら、加之余輩と雖ども又強ちに、官公立の諸學校より、全く宗教の分子を驅逐すべしと論ずるものあり、例へば中學以上の諸學校に於ては、信任すべき基督教の牧師を擇び、之れを聘して基督教の要理特よ其の道德上の教よつと、學期毎と、數回の講話を爲さしめ、學生をして隨意よ之れを聽問せしむるの法を設くべし、若しそれ小學以下の德育に至りては、其趣自ら異よして、高尚なる論說の更よ益なし、余輩の深く家庭教育の有功なるを

信すれども、悲ひ哉現今の事情の、未だ俄かよ吾人をして満足せしむるの勢にあらず、故に此等の學校に於ては、教員各自の躬行を始めとし、普通の德育法を誠實よ施行し、漸く校外よ於て其教風の良家族起り、又彼の安息日學校等の完備するを待つの外なかるべし、
以上、即ち余輩が基督教の教育について懐ける卑見の概略なり、之れを要するは基督教の教育なればとて、朝より夕に至るまで、讀經祈禱を是れ事とし、傳教師のみを養成するの謂よあらず、之れを養成するに別よ専門の學校あり、余輩の唯教育の本旨よりして觀察を下し、基督教が眞よ學生の品位を明かにし、善く教師の友となり、特よ德育上に於て大功力を有するが故よ、之れを教育全體の精神となし、又徳

育の基本とあり、以て教養したる人物をして、所謂地の鹽となり、世の光とならしめんとを切望するのみ。

基督教及教育終

明治廿八年十月十六日印刷
全廿八年十月二十日發行

定價拾錢
郵稅貳錢

發行者

東京々橋區出雲町一番地
福永文之助

印刷者

東京麴町區麴町十丁目四番地
岡本文次

發行所

東京新橋出雲町一番地
警醒社書店

賣捌所

大坂西區土佐堀三丁目
福音社

○ 基督教文學
第一集

基督教 及 佛教

定價金十五錢
郵稅 無料

○ 全 第二集 基督教 及 哲學

全 廿五錢

○ 全 第三集 基督教 及 社會

全 十五錢

右之書取揃御注文之御方へは

金五拾錢にて差上候也

